



現下の農村と交通の問題

古野清人

(一)

現代では交通の問題は都市と遜離しては全く考へられないほどに都市中心の偏向性を示してゐる、しかもこれは資本主義的體制のとる必然的な形態である。殊に大中都市に求心的に凝聚していく鐵道、電車、バス道路或は水運の發達は從來の交通運輸を急劇に異常に變換せしめるものとわれらに映するのである。試みに極東に於ける急速なる人口集中の地帶として、南京、上海間の揚子江下流地帶に次いであげられてゐるわが東京灣及び大阪灣附近の都市人口の増加帝都東京を中心として

八百萬京阪神をつないで六百萬從つてそれに伴ふ交通網の加速度的な複雑化を想到されたい。この都市への人口集中は云ふまでもなく主として現代日本の高速度なる産業化に照應してゐるものである。われらは現代産業主義そのものゝ獨自な目標を別にしてかゝる異常なる人口の社會現象を解釋しえないのであらう。このことは單に大都市即ち言はゞ million-cities に限定さるべきものではなく、地方的な中小都市についても亦多少とも程度を異にして同様である。いくつもの農村部落を貫通してゐる田舎に不釣合な産業道路の如きは直接農村のために敷設されたものよりも産業上都市から都市へと緊密に連結された線である。そして高度の都市中心主義によつてゐる産業政策はこれにも反映して農民は道路を走る貨物トラックから物資の直接分配に與るわけでもなく、またその道路は近接部落居住者の通行路として役立つるものでもない。それは一次的に村落と村落或は村落と町とを結びつけてゐる交通網ではない。このことに就いてはさきに觸れておいた如くである。(拙稿「道路と社會的距離」本誌第十九卷第十一號參照) 在來の交通は都市を中心として展開されたものであつて、農村自體の中での交通、或は局地間の交通は殆んど等閑視されてゐた。しかし乍ら、特殊の場合を除いては根本的には經濟生活の有力な一手段である交通の問題は單に都市的なものとして農村に對してはこれを留保しておいて差支へのないものであらうか。これらの點に關連して若干の私見を述べ識者の叱正を仰ぎたく思ふ。

(二)

わが國の資本主義或は産業主義は農村又は農民を犠牲にして今日の興隆を招致したとはよく言はれるところである。この種の見解の當否は暫く問題の外にして、今日農村が經濟生活並びに諸種の文化生活或は又國家施設に於ても著しく立遅れの觀あるのは否定できない。今日の國民經濟の原則は工業經濟を本位にしてゐるものであり、従つてまた後者と農村經濟との密接不離なる關係を力説する論者は尠い様である。しかし今やわれらが現面してゐる未曾有の日支大事變と共に一般の社會狀勢従つてまた國內の經濟關係も著しく變動してきたかに見ゆる。否今も尙狀況は刻々にあわただしく變化流轉して行つてゐるのである。直面してゐる緊急なる大國策を壓倒的に遂行するには何にもまして國民全般の一一致協力を前提としなければならぬ。こゝに於てか全體的國家の立場からしても國民的連帶觀念の強化が叫ばれざるをえないのである。しかもかかる強調なる精神的結合は甚だしい物質的利害關係の矛盾に立脚し難いものである。機械主義に依存してゐる產業全般には常に繁榮が隨伴し、局地の農村には極貧のみが不斷に支配すると云ふ如き狀態の下では共通の社會的連帶の紐を緊密に結びつけうるものではあるまい。

事實は重工業輕工業等の經濟も現實に於ては農村經濟から完全に遊離してゐるわけではない。工業と農業との間には連帶が存してゐる。農業は工業に食料その他の原料、消費品を提供し後者か

ら器具や金肥等を供給されてゐる等。また工業労働者は断えず農村から補充を仰いでゐる等。われらは必ずしも重農主義への復歸を提倡するものでないが、農村の最後の強みは何と云つても生きてゆくために必須な食料を産出しうるところにある。化學者ベルトロラの夢が萬一實現され人種類が悉く錠剤によつて生きる時代が到來すれば兎に角、それまでは人は主要食料を通して常に農村に依存せざるをえまい。觸手ある都市が飽くなき蠶食を試みて擴充して行けば行くほど——しかもこの擴大の條件としては食糧供給が大きい役割をなしてゐる——背面に強輩なる農村を擁してゐなければ有事の際には甚だしい危険に曝されざるをえないことになるのである。往時の農業國イギリスが近代工業に先驅して機械主義の祖國と化した時そこには夥しい富力が蓄積されたがしかし農村輕視の弊風は世界大戰の到來と共に直ちにイギリス人をしてひどい食糧難に追ひこんだのである。英帝國は今や食糧に富んだ大陸へ或は植民地へ依存してゐることを痛感してゐる筈である。農業國フランスの如きも農村人口は不幸にも次第に減少し全人口の三分ノ一強となつてゐる様である。フランスの國家不安或は社會主義の高揚は衰亡しゆく純農民の苦惱と遊離しては解釋できないものがある。また機械主義の跳梁を誇るかに見ゆるアメリカ合衆國も傲岸モンロー主義を提倡して譲らない所以のものは一には過半の農村人口を擁してゐるところにある。國內に潤澤な物資を製產しうるところに存する。このことはまたわが國にも當然あてはまるのであつて、殊にこの事變下でも急速な經濟的變動に襲はれないのは勞働力不足とは云へ主食料を確保してゐる

からである。われらは今にして農村經濟こそあらゆる健全な經濟の基本であるとの感銘を新たにせざるをえない。しかも最も數多く最も貧しいこの農村階級は相對的に悲慘の中にある。彼等の貧困を如何に有効に輕減せしめるかの手段が充分に考慮され實踐されねばならない。想ふに從來は餘りにも工業經濟が重視され餘りにも農村經濟或は地方經濟が輕視されてゐた。今日の國民經濟の急務は相互に補足的と思はれるこの兩部門に正當な地位を與ふることである。國民經濟に對するこの農村的地方的協力を等閑に附しては國民的協力の機制を完全に掌握することは不可能であらう。こゝでの問題は農村經濟との關連に於ける地方交通のそれであるから國民經濟に於ける農村經濟の地位に簡単ながらも言及しておく要があつたのである。

(III)

國民經濟の中で工業主義が常に優先權を占めて、農村經濟が比較的に看却されたこと、引いてこの跛行性が健全なる連帶的責任の觀念を培養し難いことはもはや縷説するまでもあるまい。都市への人口の集中現象そのものゝ中にも、われらは農村生活者の窮況をみうるのである。若き男女の農村からの「脱出」は單に都市への憧憬とか奢侈享樂の追求とか勞働の忌避とかに歸せしめて嚴格なる道徳的批判の笞のみを加ゆることによつて解決されうる問題ではない。それにはもつと深刻な經濟的な底流が支配してゐるのである。この經濟的害惡こそ先づ充分に検討されて匡救の手段が講じ

られなければならないのである。

農村人口が多くの場合常に過度の労働を強制され從つて物質文化的恩恵に浴する機會に乏しいのは言ふを俟たない。しかも農村の主要な労働力を構成してゐる若者がよりよき利得をめざして都市へと流出してゆくことは農村經營を更に困難ならしむるものであつた。この種の定則に加ふるに、日支事變により所謂働き盛りの農民は多く出征し或は都市工場の擴張に應じて離村してゆく。徵發されて馬や牛なども頗る減少し労働力不足は拍車をかけられてゐる。そのまゝに放擲しておけば米及び裏作の收穫は必然に減少する傾向にある。假に金肥等の十分な配給がこれを補助しえたにしても收益の低下は相對的に見て恐らく不可避であらう。

現在の農村最大の困難は労働力の不足にある。よつて最大の急務はその労働力の補充でなければならぬ。しかるに人的要素を以てする労働力の補充は現況を以てしては不可能であらう。應召者若干の歸還が早く實現しえたとしても、工業動員即ち軍需工業地帶への出稼ぎは増加こそすればなるまいと思はれるからである。所詮は小學生老人等の一段の勤勞奉仕を行ふに止るであらう。どの意味からしても村の主動力である中堅層の量と質との低下は避け難い要是如何にして部落の労働力減退を防止するかの寧ろ消極的な手段にかゝつてゐるのである。この場合第一に取上げられるのは在來の戸別作業を部落又は集團作業へ移行せしめることによる一種の經營合理化の過程であらう。實際にはこの方法によつても技術上の不便は相當介在してくる

と思はれるが、朝野を擧げての總動員下にあつては、瑣細の不便は忍ばれなければならない。しかも刻下の田植の野繁期に直面しては、先づ應召家族に對する部落の勤勞奉仕である。農村經營が姻籍近隣の相互扶助によつて維持されてゐたことは、今も割合に變りのない風習であるが、最近に至つては、これが府縣當局によつて多少とも組織化されてきてゐるところに著しい特徴が見出されるのである。これは從來の農村經濟更生計畫の進捗と合體して、眞剣に勤勞を通しての銃後の祖國愛を鼓吹してゐることは、疑ひを容れえないところである。村又は部落を單位とした勤勞奉仕團が、田植や收穫期の如き農繁期に目醒しい活躍をなすことは豫想するに難くない。それにも拘らずこの種の組織は、純朴なる農民が非常時に際會して過度なる勞働による自己犠牲によつて、部落共同體の勢力減退を防止し様としてゐる痛苦尠ながらざる奉仕的美風であることを正しく認識さるべきである。

換言すれば、この種の勞働組織に餘りにも強制性をもたせることは無理であり、かくては所期の目的にも悖ることとならう。

寧ろこの際急いで確立さるべきものは、國內農業經營の全面的な合理化である。勞働の人的要素が減退こそすれ、増加する見込みのたゞない現状では、何を拱いても從來の勞働そのものゝ合理化が急務であらう。これには技術そのものゝ改善も問題とならう。更に優秀な道具の使用等が必要となるらうが、しかし農業形態は概して原始的であり機械力によるよりも人力を主體とするのであるから、格別に精巧なる器具を採用することを要求してゐるわけではあるまい。かかる勞働力の不足の

場合に第一に着目すべきことは、必須不可缺の労働以外の労働を節約することである。この點から部落に於ける交通に關連する労働時間を能ふだけ節約することを重要な題目の一つとして取上げるべきであると思ふ。

(四)

農村では平素田畠又は山林への往復に浪費さるる時間は割合に多く、又これは可成り勞苦あるものにも拘らず、傳統的に地理的に止むをえざるものとしてか多くの地方では殆んど何らの處置も講ぜられてはゐない。自轉車等の使用が時として舊習の打破をなして作業の便宜を計つてゐる場合もあるが、それも家族の働く人々凡ては享受しうる利便ではない。鍬を持ち荷を擔ぎ、牛馬車を引いての耕作地への往路は時間の消費以上に各人の労働力はこのために吸收され勝となる。殊に農繁期の場合には農村家族にとつて田畠への距離はまさに耐へ難きものになる。長距離で困苦多くしかも比較的收穫少き地域から、短距離で交通に安易な豐饒の地域へ悉くの農家が集中しうれば別に問題は無いのであるが、これが事實上許されないのは餘りに明白である。けれども村内の道路が能ふだけ改良されて、交通の困難を克服し時間の節約を計る様に計畫されることは必要である。道路の改良と共にまたその道路によつて運搬さるる器具の改善にも留意されなければならぬ。例へば耕作用としての馬や牛は農村の労働力を強化するのに大いに役立つてきたものであるが、一ヶ年を

通じてこのための役割を演ずる期日は割合に少ない。しかも年中馬牛を飼育して行くことは農家としては相當の労力を要する。殊に馬は飼育するに困難を伴ふ家畜で各地方ともに次第に牛が馬に代つてきてゐることは一面これら的事情と關聯してゐると思はれる。現在に於ては牛馬を無理に補充して飼育するよりも、部落内の貸借による等の他の方法によるを賢明とする。リーヤカーの採用などは種々な點から運搬に便利多いがその効用を益すためにも道路の改良は望ましいのである。また生産物を直接に地方都邑或は中心都市へ搬出するためにも更によき道路が用意されねばならぬ。もちろん地方殊に工業都市の發達してゐる地方では最近農村の道路も頗る改良され或はまた修繕されてゐる様であるが、これは決して未だ全體的な動向ではない。能だけ農村労力を有効に保有するための村内道路引いて村より地方都市へと通ずるの改良こそ、周到に研究調査して一刻も早く實現さるべきものと思ふ。われらは例へば臺灣の蕃地を歴訪して、高地に於ても、低地海岸地帶に於ても道路が頗る立派に整備してあるのに吃驚するが、そしてまた本島人部落など交通的に著しく恵まれた場所に位置してゐるのを羨望の念を禁じえないが、翻つて内地農村の狹隘にして高低多く而も河水に犯され易い道路に想到するとき、それによつて齧される直接間接の不利益に慨嘆せざるをえないものである。本邦農村の大部分は對岸の支那大陸の沃野に於けるが如くに天惠の状態に依存して平素寧ろ手を拱いてゐて、而も收穫に際しては鼓腹擊壊しうる如き好地位に置かれてゐない。不斷の刻苦勉勵によつて能動的に自然に働きかけてこそ、換言すれば尠ながら勞働力

を犠牲にしてこそはぢめて五穀豊饒を祝福しうる状況にあるのである。耕地、山林に於ける直接勞働以外の雜用に多くの力を割かしむるのは極めて不生産的と云はねばなるまい。廣範圍に亘る農村經營の合理化の問題はわれらのかくこゝで觸れる點ではないが將來に於ては從前とは異りわが農村經濟は支那の農村經濟と密接な關係をもつに至るであらう。その意味からしても本邦農村經營は慎重にしかも勇斷を以て合理化されて行かねばならぬ運命にある。「人類進歩の歴史は人類自らの征服によつて生れたところの困難に對抗する人類の鬪争の反映である」と記した者がある。われらに現實の回避は許されない大膽に鬪争して最良の收穫を得べきである。農村經營は悲觀的でも宙に迷つたものでもないし、またかゝるものではあつてならないのである。國家の全體主義は盲目的なる機械主義の支配を抑制して、銳意農村の復興に乗出すべきことは言ふをまたないところである。

筆者は農村經濟の問題を専攻する學徒でもなく、また交通問題の社會學的研究に志してゐると自信する者でもない。これらの點に於て全くの素人ではあるが頃日本邦に於ける農耕儀禮調査のため諸地方に赴く機會を與へられ、その都度田舎の道路の貧困に胸打たれるところが多かつた。偶々曠古の大變に遭逢し、長期戰の體制下にある農村の勞働力減退が憂慮されつゝある現況に鑑みて、率直に平素の感想を吐露して農村道路改良への關心を喚起したく思つた次第である。